



さかき傘
挿絵：天海雪乃

LOVE

アダム9

田心春期な

試し読み版

あとみっく文庫

じ ゆう に
地遊尼エンジュ

睦月を護衛する天使少女。身の丈ほどもある大剣を操る。



ふじ た むつき
藤田睦月

すべての女性を支配する“蛇眼”の力を秘めた少年。魔族の女王リリスに取り込まれてしまう。



い べくき
伊部草マキナ

秘密組織「FeTUS」の一員。同級生、睦月を監視するも彼へ惹かれていき…。



ミスA

『FeTUS』幹部の一人。中世以前から生きていたと思われる、年齢不詳の幼女。



里輪ルシア

睦月に好意を寄せる魔族の美少年。リリスとは敵対している。



白原恋 ラヴリエル・バラン

睦月が慕う先輩の少女。その正体は『FeTUS』の騎士、ミスBである。

リリス

あらゆる魔族の母。先代のアダム・アヴァロンに恋い焦がれており、その生まれかわりである睦月と融合する。



勝江昂

睦月のクラスの担任教師だが、正体は『FeTUS』のエージェント・黒猫ことミスC。



地遊尼ミカ

睦月とエンジュの保護者となる先輩天使。しかし実はリリスと内通していた。



リゼル・バラン

恋／ラヴリエル・バランの妹。黒崎俊太郎に同行している。

黒崎俊太郎

黒崎家の跡取り息子。リゼルを従えている肥満体の男。



STORY

黒崎家に潜んでいた魔族の女王リリス。アダムに恋い焦がれる彼女は、その生まれかわりである睦月と結ばれようとしていた。エンジュ、マキナ、ルシアは睦月の居所を突き止め救出に動くが、ミカの裏切りにより阻止され、リリスと睦月の融合を許してしまう。そしてリリスの力とアダムの力がひとつになることで「完全なもの」と化した睦月＝アヴァロン。エンジュ、マキナ、ルシアは

彼の意思に取り込まれかけるも、ミスAが最後の希望として三人を逃がすのだった。アヴァロンを拒絶したことで砂となって消えてしまうミスAの肉体。さらにリリスとアヴァロンの「この世界からあらゆる不和を取りのぞく」という意思是人間社会の侵食をはじめ…。

これまでのあらすじ

「意外、でしょうか」

「意外？」

「理想的ではあると思います。ここには争いも、後悔も、死もない。『天界』出身の天使としては、人類が思い描く『天国』というのはこの世のどこにもないと思っていましたが、きっとここがそうなのでしょう」

ただ——表情はそのままに、女のほうを見る。

「藤田睦月少年が、こんな世界を望むというのは意外です」

そこには美女はおらず、アヴァロンと呼ばれる青年もおらず。背の低い、成長期の少年が一人。

「あなたが『完全なる世界』を望むとしたら、それはもっとコンパクトで、緩やかな変化しかないかと思っていた。ここまで急進的に不和のない世界を望むとは、意外です」

「そう……」

それまでなかった見解なのだろう。視線をプールに泳がせる少年。

「でも結局、これしかないかと思っただけです。平和で、みんなが幸せな世界って」

「その帰結には僕も賛成ですよ」

「この五日間で思っただけです。人間って究極的には、中にすぐく卑しいものを飼っていて。」

だからみんなが幸せになれるような世界って絶対に作りようがないって」

「それも賛成です」

「だから、この方法が一番だと思った。僕がみんなの『幸せ』になる。そのかわり、みんなにはその卑しい部分を捨ててもらおう。これが一番いい方法だと思うんです」

「……」

最後の言葉には何も返さないラファ。

それでばつが悪くなったのか、少年は苦笑して、

「人の卑しさを責められるような人間じゃないのは分かっていますけどね。その、人の中にある暗くてぐちよぐちよした部分、僕だって飼っています」

「卑しさのない人間なんていません。天使も、魔族もです」

「ラファさん。実は僕、あなたのこと苦手だったんです」

「……おや」

これは意外だったらしい。初めてラファの顔色が変わる。

「嫉妬……かな。エンジュが、あなたには他の誰にも見せない、僕にも向けてくれない顔をするから、嫉妬してました」

「兄妹ですからね。君とは決定的にちがう。これは仕方のないことですよ」

「反省してます。もちろんこんな私情はこれからのことには挟みません。あなたのことも愛して、幸せにします」

包み隠さず言われたのには驚いた様子だったが、納得はいつたのだろう。またすぐいつものつかみ所のない笑いを取り戻す青年の、手をとる睦月。

ラファは分かっているとばかり、小さく首を縦に振り、

「老婆心ながら、睦月くん、ひとつ訂正を」

「はい？」

「あなたが僕に向けた感情は嫉妬だったのかもしれない。それは君にだけ分かる気持ちです。しかしそれが、エンジュを思いやつてのものである以上」

——ボツ

「その薄暗い感情は、卑しさとはちがいますよ」

聞き返すこともできない最後の最後にそう残り、ラファだったものは淡紅色の炎に消えた。

水に還元される人体とちがい、天使の肉体は炎に還る。

解き放たれた光の粒は、同じようにプールへ落ちていった。

「……」

残された言葉に、顔を強ばらせる睦月。

「卑しさとはちがう……？」

『どうかしたか』

「あ……リリスさん」

ふわりとプールの水の一部が舞い上がったかと思うと、空中で黒く染まり、そのまま長い白金の髪を垂らした美女へと変化した。

「いえ……ラファさんが、えと」

言葉に詰まる睦月。

最後の言葉の意味が分からないが、聞くにはまず彼への嫉妬にかんしてをこの美女に説明しなくては。

それは恥ずかしいし、面倒だし、

「なんでもないです」

『そうか……んっ』

それよりも。と抱き寄せた。

一瞬驚き、すぐに嬉しそうにしなだれかかってくるリリス。

「さっき見てましたよね。僕と先生たちの……」

『む……』

同一人物なので、見ていたというか意識していたというべきか。船をこの町まで動かす間、ワインのつまみにとシユバルツ、恋の二人を同時に果てさせていたとき。彼女もそれを経験していたと。

「まざりたいなら言ってくればよかったのに」

『ま、まざりたくなどあるものか。このわらわが、人間どもなどと』

妙に子供っぽく、ぶうつと膨れた顔で言う。

『ただその、わらわがいるのに……その』

言いにくそうだった。

子供っぽいというか、ある意味で子供なのだろう。小さく笑う少年。

何をして欲しいかは、同一人物なので分かる。リードする形でプールサイドに寝かせた。気を利かせた周囲の天使たちが下がっていく。

『あ……っ』

着ているローブをすりんと撫でた。布に見えたそれは、泡のように跡形もなく消え、ミルクを溶かしこんだような白肌があらわになる。

『だ、抱くのか……わらわを』

「いやですか？」

望んでいるのは分かっているが、あえて聞きながら寝かせた身体に手を這わせた。

白人のそれが近い。シユバルツと同じもちちつとした肉質で、体温が高い。こういった肌は発情のほどが血の気の通い方で分かりやすい。

むにと手のひらより少しはみ出るサイズのバストを握る。

『ま、まあ……よかろう。光栄に思うがよい』

許可は出すが、意外とシャイなようで、ふいっとそっぽを向いた。

ちよつとエンジュに似てる……。苦笑しながら少年は、その肢体を縁取りでもするよう
に、あらゆる箇所へ手のひらを這わせた。

完璧とっていいスタイルである。やや身長高め、八頭身だが、肩は緩やかに丸いため
のつぼな印象はない。大きすぎず小さすぎずのバスト、そこから急角度でくびれる腹部、
緩やかに盛り上がるヒップと傾斜も整っており、すらりと長い足は筋肉的な強ばりは感じ
させないのに、つま先まで綺麗な逆三角形で伸びている。

人間の理想的なスタイルを描けと言われたらこんな姿になるだろう。

もしくは、あらゆる人間の本能にある美の基準がこの、狂乱を招く魔の姫君を思い描い

たものなのか。

少々恐れ多いくらいの美しさだが、

「リスさん」

つんとした顔がエンジュに似ている。というだけで緊張が薄れ、少年は積極的だった。肌がぼーっと火照って、ミルク色に発情のピンクが乗り出している。積極性は充分に効果を示している。

ただそうして身体がこなれてくるにつれ、肌の奥で筋肉が強ばっているのが気になった。普通ならここまでくればもつとリラックスするのに。

まさか、思ってた顔を覗きこむ。

秘密が知られたリスは、「う」と苦虫を噛みつぶしたような顔になり、

『そ、そうだ。経験は……ない。この身体、男を迎えたことは一度もない』

「え……アヴァロンさんは？」

『アヴァロンは……リユーシア以外誰とも添い遂げることはなかった。わらわもあやつ以外に身を許す気はなかったから』

「そうなんですか」

さすがに驚かされる。魅力という要素が振りきれている彼女なら、性に関しても百戦錬

磨だとはかり。

『ふ、フン。笑うがよい。百億の魔族の母たるこのわらわが生娘などとな』

魔族は増殖に性行為を必要としないのでそうなったらしい。

ちらつと後ろを見ると、遠くで見ているミカがぱちりとウインクした。

初めてあったときの彼女が、いきなり睦月の童貞を奪って。その後もマキナ、シユバルツと経験を積ませてきたのは……これも理由だったのだろうか。

「分かりました。僕、慣れてますから、任せてください」

百戦錬磨とは言わないが、前世ほど誠実ではない睦月なら、相手にはびつたりかもしれない。

「自分で持つて」

『む、うむ』

長い脚を両方曲げさせて、ひざを自分で抱えさせた。

『お、おい、なんだこの格好は、恥ずかしいぞ』

とらされたあとで、赤ん坊がおむつを換えられるような格好だと気付いたのだろう。怒る。

「いいからそのまま」

『ぐ……お、恐れを知らぬ子供だ。百億の魔を統べるこのわらわにこんな……』

「フフ、百億もいたら何人かは怒っちゃうかもですね。僕がこうやって、リリースさんのお尻の穴までイタズラしてたら」

『あ……っ、んっ』

M字に開けて無防備そのものの中央部を撫でる。

文句は言うくせに処女喪失には協力的で、姫君は格好を解こうとしない。むしろ下側、お尻の付け根を責めると、腰を浮かせて少しでも指が動きやすいよう協力してくれさえする。

この格好だと真っ白なクレパスがひし形に開いて、奥の色素の薄い粘膜が丸見えだった。処女かはともかく、使い込まれていないのがよく分かる、ヒダの薄い未熟な肉路だ。

あえてそこは刺激を避けて、まずはM字に開いた美脚を撫でまわした。太ももを中心としてひざやくるぶし、ときにつま先の指の間まで。

そこから腿の裏を通ってお尻に戻り、アヌスの括約筋を指先で割ったり撫でたりする。丸まった肢体がびくと揺れた。長身なうえ髪が非常に長いため、小さな動きでも毛先に伝うころには大きな動きになっていて、プラチナプロンドが照明設備のようにキラキラと揺れている。

『あ……ふ、……な、なんだこれは……ンう』

手では下半身。上半身へは口をやる。

可愛らしいおへそに舌を突っ込んで、つうーつとへこんだお腹のラインにそって上向きに舐めていった。

乳頭にキスすると、「あんっ」と可愛い声が出てしまい、不覚に思ってたきゅつと下唇を噛むのが可愛い。

汗の浮いてきたわきの下を通って首へ、頬へ舌を上らせ、

「……」

顔まで来たとき、急に動きを止める。

真正面から顔を見つめて、けれど何もしない……。

『あ……ン』

何か言う必要もなく、向こうから唇をくっつけてきた。

初対面でしたものとはちがいが、ねちねちと舌を絡め合う、性交に近いペース。

『むふ、むふうんっ、んっ、あ、ンンン』

リリス姫はその完璧とあっていい美貌を、自分から崩したがるように悩ましく眉をひそめている。ひざを押さえていた手が離れて、長い足が解放された。つま先が震えながら、

すりんと少年の腰にすり寄ってくる。

手は代わりに少年の服を掴んだ。今度はこちらの着衣が、ぱつんと泡になって消える。お互い裸に……もう言葉なんて必要ない合図だが、

「……したい？」

少年は意地悪く、あえて聞く。

女は彼の口からすくいとった唾液を飲み下しながら、こくこくと首を縦に振った。

『う、うん……欲しい。ここが熱くて……もう』

夢を見ているように……。

『アヴァロン……汝の女にしておくれ』

「……はい」

アヴァロンの名で呼ばれることには違和感があるが、表には出さない。彼女がそう望むなら叶えるだけだった。

いまだけは記憶の隅っこにある、夢で見た青年になりきって、

「行くよ、僕の妻、リリス」

『……はい』

ぬるり。とあえて刺激して来なかった箇所へ、そのまま切っ先を押し込む。

処女地は初々しく引き締まり、異物に大きく戸惑う。外部はしっとり汗をかいているが、内部のヒタにはまだ潤いが足りないのので、痛みもあるだろう。

『あ……ああっ、うあ、あっ』

その股間が焼けるほどの熱量こそが、少女が大人に変わる証だ。

幾多の獣を統べ、人の世の闇も手中にしてきた魔の母が、女に変わるのにふさわしい。

『ああっ、は、はああ、太い、ああ、すご……いい』

『痛いですか？』

『う、うむ……少し。……そちらはどうだ。痛くはないのか』

『全然。すごくいい感じですよ』

『そ、そうか……なら遠慮なく、使ってください。わらわはこうして、アヴァロンに貫いてもらっただけで満足よ』

長い髪をざわざわさせながら、うっとり目を閉じるリリス。

『……ありがとう藤田睦月』

『……』

言いながら、改めてキスしてきた。

彼女も分かっているのだろう。これはただの自己満足。もうアヴァロンという青年は、

この世のどこにもいないと。

せめて彼が初めてリユーシアを抱いたときの記憶をたどって、同じく童貞だった彼らしいやり方を真似た。睦月にできたことはそれだけ。

それでも姫君は、十分に満足してくれたようだ。

——ぬちるっ。

『ン……っ』

ならここからは。膨らんだ亀頭を器用に使って、狭い肉路を滑らせていく。

ここからは経験豊富な藤田睦月として、

——ぬらっ、ぬるっ、ぬるっ。

『うふっ、ふっ、ふうう、ン、ン』

腔壁の隅々を、高く張ったカリでさする感じ。前後させながらペニスにしなりを与えて、横へ、横へ。穴をくつろげるような動きを与える。

初めのうちは拡張感に慣れない様子のリリスだが、身体は十分に大人だ。その筋肉の緩め方、広げ方を、無意識に学習していった。

同時にちくちくと刺激されるヒダは、一枚一枚が練れて柔軟性を増し。同時にとろりと蜜の分泌を増やしていく。

『あ……ああ、なんだこれは。ン、あ、あは……ああつ』

「いい感じにとろけてきましたね」

声と、ペニスに迫る肉の感じで分かった。

規則正しく、優しく刺激していれば、身体中にほどこされた愛撫の余韻に、その部分の性感もついてくる。花蜜の分泌が増えて、ペニスに馴染んでくる。

ピストンを開始した。半分ほど抜いた太茎には、ねっとりとした汁が充分に付着している。肌に馴染むくらい吐きかけられているのが見える。

「どうですか。ン……奥のほうぐりぐりされるの好きみたいですわね」

神経の多い浅瀬よりも、子宮を射ぬかれたほうが感じるタイプ。気付いたら、すぐにそのやり方を中心に置く。

『あ、ああつ。なんだこの感じは……。これがせつくす、か？』

『はい。リリスさんの身体、大好きみたいですよセックス』

『無礼な、そんな、わらわがそんな品のない女だと……。ああんつ』

踊る亀頭でおへその裏、Gスポットを叩かれるのが特に弱いようだ。強がりの言葉の途中なのに、大きな喘ぎが邪魔をした。

ピストンを繰り返すごとに、大人の処女地はトロトローっと熱とエキスを増して。どん

どんセックスに適した形になっていく。

目の前にある勝気な美貌が、湧きあがってくる初めての感情に戸惑い、切なそうにゆがむのも楽しかった。とくに時タイイところをついたのだろう。あまりの快感に切れ長の目の焦点が合わなくなる、美しさが崩れる様がオスの生理をくすぐる。

「リリスさん、可愛くなってきた」

『む、か、可愛いとは……はんっ、なんだ。わらわを子供扱いなど……んあっ』

「可愛いですよ……んっ」

こちらからキスしてやった。

文句を言いたそうなりリスだが、激しく女肉をかき混ぜられながらの優しいペースには敵わず、「ああん、ああ、生意気な」と小声で呻くのが精一杯だ。

睦月はさらに、少し下で揺れるたわわなバストを転がしたり、キスの位置を顔の横に移して耳朵をねっとり舐めながら、

「可愛いよりリスさん、リリスさん……」

『ああ……っ』

快楽と均等に、熱い吐息が耳の中で鼓膜を、脳髄を愛撫する。

リリス姫はもう意識が飛びそうな顔で、悔しげに歯を食いしばった。エンジユやマキナ

を始め、相手をする女性みんなを楽しませるのが好きな睦月特有の、ねちっこくて丁寧な責め方。処女の彼女では受けるのは経験が足りなすぎる。

『お、おのれ小僧……。わらわの、んっ、心を奪うつもりだな』

「そんなつもりは」

『わらわが愛するのはアヴァロンだけなのに……。ううう。おのれ藤田、むつき……。つ。汝が、汝が入ってくる……。では、ないかっ』

「……」

狙ったわけではないのだが、そう言ってくれるなら。少年は力強く腰を送り続けながら、改めて彼女を正面から見つめ、

「ならいまだけ。いまだ僕のこと、アヴァロンさんくらい愛してください」

『うぐ……。』

「ねっ？」

提案する。

「……」

姫君は、さすがに言葉では何も言わないものの、
両の手足を首と、腰に巻きつけてきて答えた。

——ずぐるっ。

『っ、ふああああああっ！』

ひだひだを潜る怒張にぐんと血の気が載る。蜜肉のほうもひとつに溶け合うよう食いつきを強めていたから、官能のツボを丸ごと揺さぶるような衝撃になった。

『も、うあつ、くるっ、ふあああすごいの来る、すごいのがああっ』

エクスタシーは知っているらしい。ただ想像したこともない量がせりあがってきて、女は乱れた髪をぐりぐりと床にこすりつけながら嗚咽を放つ。

安心させるべくこちらからも彼女を抱きしめる睦月。

二人の身体は、ふたつに分かれたことを忘れたようにぎちぎち密着しあい……。

『んあ……ッ！』

最初に昇り詰めたのはリリースだった。

『んあつ、あああ、アアアあああ』

少年に蕩かされた睦道が、急に緊張を取り戻してぎゅつと窄まる。それから奥からどつとエキスをしぶかせて、小刻みに震え、

『ああああイクウーーーーーッ！』

長身の肢体がのけぞりかえった。



上にのっかる少年を持ちあげるほどのいきみっぷりだ。細い腰が折れてしまいそうで、睦月は押さえ込むような感覚で抱きしめる。

そうして最後まで気を使いながら、

——びゅるるるるるっ！　びゅくっ！　びゅるうううーっ！

とっぷりと大量の熱源を、まだ誰も入ったことのない子宮へむけ吐精した。

『ふあっ、くああっ、うああああっ』

エクスタシーが知らないゾーンまで到達しているらしい。噴出するどろつきを腹内に感じるのにさえ喜びの悲鳴をあげながら、のたうつりリス。

初めての体験にしてはいい感じっぷり。こんなところもエンジュに似ている気がして、苦笑する睦月。

そのまま余韻が去るまで、二人抱き合い続けた。

☆

☆

『……認めよう。セックスの技術は大したものだ。このヴァギナはもう汝の奴隷にされているぞ、藤田睦月』

ふと声が聞こえるときともに、下に敷いた女体の柔らかさがなくなっているのに気付く。
『だが我が心はやはりアヴァロンのもの。汝は……えと……は、半分くらいしか入れてやらぬ』

最後まで強がりを残して、もうリリスの姿はなかった。満足したのだろう、また彼女とは同一人物に戻る。

「あら、リリスもう寝ちゃった？」

「はい」

ちようどそこで、ワインをいれたグラスを三つ持ったミカがやってくる。

リリスのいた隣に腰掛け、

「一杯やろうと思ったけど、その姿のキミと飲むのはなんだか気が引けるわね」

「はは」

飲むのはやめて、グラスはわきに置いた。

「ラファさんも、もう済みました」

「そう」

「……」

「なにか言われた？」

想像より倍か、十倍はレベルがちがう。

「滅びの浄剣!!」

——ゴッツ!

露払いでは意味がない。爆出する炎を収めた。

愛剣の中央に収める。

外殻にあたる刃の部分が吹き飛び、剣として振るえる大きさまで凝縮した輝く剣で。

「ダッツ!!」

斬りかかった。

威力に全振りした大薙ぎ。青年の盾になっている以上、受けるしかないはず——。

——ゴルッツ!

エンジュの読みは正しく、全力のフルスイングが直撃した。

読みとちがったのは、爆出する炎の刃を、ミカが手刀で受けたこと。

最高速度で最大の威力を乗せて打ち込んだのに、受けとめられたこと。

「く……ッ」

「接近戦はどうかしら?」

「双噴射ッッ!」

威力では押し切れない。剣をふたつに分ける。

ミカは背からの炎を纏まとわせた手刀で応じており、もともと両手。二刀流同士。

——ガガガガガガガガガッ！

至近距離でぶつかりあう。

剣を使うエンジュに対し、素手で応じるミカのほうがいくらか速かった。連撃を巧みに裁きつつ、振り回す剣の隙を縫うように拳が——。

——パァンッ！

エンジュの顔を捉えた。

「!?」

その手応えの軽さに、今日初めてミカの顔が驚きに強ばる。

殴りつけた拳を吸いとるように、エンジュの頭部は自分から引いている。剣に乗せていると思われた重心がいつしか下半身へ移っているのを見落とした。

小さな身体は殴られた勢いそのままに、空中で赤い髪を回せて旋回。

——ゴッッ！

そのまま遠心力を乗せた蹴りが、カウンターで顔を狙う。

「ゲホッ！」



狙いはあご——。ギリギリでかわすが、喉を蹴られた。怯むミカ。

「つぐ……大したセンスだわ。才能はあなたが上ねエンジュ」

「ツリヤアアアアアアアアアアツツ!!」

もちろんその隙を見逃すほど戦闘部現行最強の天使は甘くない。

怯んだ瞬間を狙って剣を一本に戻し、全体重を乗せて突っ込んだ。

斬撃では対応される。ならば突き——。

「あと五十年で私に勝てるわ」

——ブシャツツ!

光の剣先は正確に、ミカの胴体を捉えた。

だがその瞬間、今度はエンジュが手応えの軽さに驚かされる。

日頃から出したままのチョコレート色の腹部は、光の先端が刺さった瞬間、赤い炎とな

って吹き飛んだ。焦る少女の顔を、引きちぎれた上半身が掴み、

——ガツツツ!

「んが……っ!」

頭突きを返した。

それで突進が止められる。クラクラきてその場に倒れるエンジュ。

ふたつに分かれたミカの上半身と下半身は、そんな彼女の剣から放出されるプラズマを吸いとりながらくつついていく。

天使同士とはいえ、敵の炎で聖炎を補うとは……。発想が追いつきもしなかった。少女は唾然となるばかりだ。

力と速さ以上に、圧倒的な経験値の差が出ている。

「もういいわ、ダンテ、仕留めて」

そして闘いにおける効率性の考え方も。

二刀流での格闘でしばし受け合っていたとき、すでにエンジュを、後ろで見守る十三人の中央へと誘導していた。

十三人が放つバニラ色の炎が、額と鼻をうってふらつく少女をすでに狙っている。

「うぐ……くそっ」

一対一では負けを認めざるを得ない。エンジュは悔しそうに歯がみして、

「伊部草！ まだなの!!」

巨大なウサギに呼びかける。

「完了した」

その腹部が裂けて、マキナが姿を現した。

ウサギの中身は高度なデータバンクとなっており、ケーブルだらけだ。マキナは裸で、だが肌がほとんど見えないくらいケーブルの先端が刺さっていた。中身は例の黄金の糸のように皮膚の分子より細かいため、刺さっていても傷はつかないが。

糸を引き抜いて外に出てくる少女。

頭のとっぺんに二箇所、ウサギの耳の形をしたデバイスが刺さっている。頭蓋骨に侵入して脳まで刺さっている。

「最終式Yデバイス『オクロック』、全データダウンロード完了」

同時にウサギの赤い目から光が消えた。引き抜かれた糸が形状を変えて、黒いラバー上に変化し、裸の少女の身体を胸から股間まで最低限隠す。

「あらあら、可愛いバニーさんだこと」

「グランギニョルシステム作動。当次元当座表の分子流動測定完了。あなたの行方あらゆる行動に対抗可能。降伏を勧告する」

「あらそう?」

エンジュとはちがう手合いの登場に、楽しそうにクスクスと笑いながらミカは、親指と人差し指だけ立てた「てっぼう」の形で指を向ける。

「FeTUSは二百年くらい、天使に対抗できるよう研究を重ねてきた。だったわね」

[Positive]

「三百年前じゃ全盛期はとっくに過ぎてたけど、私のデータは入ってる？」

B A N G。ウインクしながら人差し指をひよいとあげると、弾丸代わりの赤い炎がマキナを狙い放たれた。

小手調べとはいえ解除しなければ人体なら容易く燃える密度の炎……だが。

——ぱんっ。

炎はミカの身体を離れ、二メートルといったところできき消えた。

いや消えたのとはちがうか。マキナの後方十数メートルで赤々と燃えて、そのまま夜空へ直進していく。

「あら……」

あてが外れて目を丸くするミカ。

合図と共に、ダンテのうち五名が手に溜めたバニラ色の炎をマキナに放つ。

だがそれもやはり数メートル進むと彼女の後方まで飛ばされた。同時にミカは背中から出した翼を拳のように丸めて放つが、それもやはり飛ぶ。

拳を引っ込めると、後方に飛んだ炎も戻ってくる。

空間が断絶しているようだ——彼女に近づいたところから遠くへ飛ばされてしまう。

「この空間内の全分子を螺子^{バネイリ}付き化した。次元拝領、Complete」
いつもよりさらにうつろな目で言うマキナ。

魔女自身は静かだが、頭に刺さったうさ耳は凄まじい電力を伴ってフル稼働していた。

主の把握する空間内にある、全ての分子の動きを、最小単位の量子的なゆらぎのレベルまで把握しなければならぬ。地球上の全てのスパコンを合算しても話にならない速度の演算処理であり、それについていくマキナの脳も無理が大きい。

だがやるだけの価値は十二分にあつた。

——シュンッ！

炎がダメなら物理的に——天使のひとりが近くにあつたナイフを投げつけた。

それは魔女の眼前で、ぽんつとシロツメクサに代わり、地面に落ちる。

「物体の量子相転移、Complete。……問題なし」

「……天使が言うのもナンだけど、魔法ってホントにあるのね」

物理的な攻撃は姿を変えられ、エネルギーは届かない。さすがに数千年の人生で初めての状況なのだろう、啞然としているミカ。

未来予知を行うグランギニョルシステムをフル稼働させて、当該座標の分子の動きを全

て計算、予想式に当てはめる。

神はサイコロを振らない……全ての分子の動きが見えているマキナが影響を与えれば、この場にある数秒後の未来を量子的にいじることが可能である。生じたエネルギーを別の場所へ追いやることも、ナイフという事象を別のものに作り替えることも。

「未来の書き換え……か。科学つてのもほとんどないわね」

「ひとつ訂正。FETUSの研究は常に人の世のためにある、その一環としてあなたたち天使への対抗策を講じたまで。研究の主題ではない」

「……はは、ナマイキ」

「あらゆる学問は完全を求められるが、人がやることに完全はあり得ない。時計の針はいまこのときも刻々と時間を間違え続けるものだから」

床に落ちたシロツメクサを基点に、焼け焦げるデッキに草が生え、草原に変わった。

「ゆえにその不完全を理解しようとするのが学問。ミスAが何年も計算し続けた答えのひとつ。永遠に理解できることのない領域を、現実の尺度へ当てはめる力」

向こうにはティータ^{魔女}タイムを^{人形劇}楽しめそうな白木のテーブルと揺り椅子も。

「これがGrand Guignol de Iris 最終幕、ALICE」

「ようやく動けるな」

天使の炎は弱点のため隠れていたルシアが、ぴよいつと動かなくなったウサギの影から飛び出した。いまならマキナの後ろにいれば炎は届かないし、

「伊部草、道をお願い」

[Positive]

お返しとばかり、マキナも手をとってぼうの形にしてミカの方へ向ける。

引き金を引いた瞬間。

「くあ……ッ！」

——ゴッツ!!

ミカと十三人のダンテ。全員の身体が火を噴く。

「ちよつ、な、なにこれ!？」

腹部を中心にゴウゴウと音を立てて燃える十四人。熱くはなさそうだが、理由が分からず戸惑うばかりだった。

「っ、まさか——ぐっ」

ぺつとツバを吐くミカ。



吐いた液体が床の草むらにぶつかると、それは黒い獄肉サキユクニクと化した。天使の炎の真っ只中に置かれたのだ、次の瞬間には灰になって消えるが……。

自分たちの身体が燃える理由が分かった。

「ちよつとお、人様のナイスバディ、レイブしないでくれる。私も気持ち悪いし、この子たちなんてみんなバージンなんだから」

「あははっ、いい経験なんじゃない」

楽しそうに笑うルシア。

ダンテ十三人も異変に気付いた。痛みというか生理的な不快感で、キィキィとガラスをひっかくような悲鳴をあげ、のたうち回りだす。

天使のエネルギ―をいずこへ弾き飛ばしたのは逆。魔族の力を、十四名の身体の内側へ転送したのだ。唾液、血液をはじめとした肉体を構成する水分が、魔族の影響を受け獄肉サキユクニク化している。

「つたく……う」

天使の身体は、あらゆる魔を立ちきる神の光。

神の雷に慈悲はなく、例外もない。魔族が接触したなら自動的に焼いてしまう。自分の身体の水分を、自分自身が勝手に焼いてしまう。

魔族の影響を受けるのは部分的だが、血管に到達している。血液が循環すればするぶんそこから失血していくに等しい。加えて、

「ミカ……降参して。もういいでしょう」

フラついていたエンジュが身体を起こした。確かに勝負はついたようなものだ。

いま、炎を使っていない状態の。生理反応だけでも血液はどんどん抜けていく。これが戦闘を始めれば、自分で放つ炎で傷はどんどん広がるし、なにより身体の中に、天使からエンジュの攻撃が致命傷になりうるウィークポイントを作られたようなものだ。

やれやれ……髪をかきあげるミカ。

☆

☆

「ダンテ、あなたたちはいいわ。下がってちょうだい」

控える十三人に向け合図した。

十三人は感情というものがなく、指揮者であるミカに言われれば当然のように目を閉じる。次の瞬間、ラファと同じようパシユッと全身が炎になって弾けた。金色の種が十三、

プールに入っていく。

ぎよつとなるエンジュたち三人。

仲間全員を待避させた。

だが降伏ではあり得ない。ミカ一人だけ残っている。ということとは……。

「構えてエンジュ。本気出すけど、瞬殺したんじや面白くないわ」

かきあげた髪の下から見えた耳につけてある、ピアスを外すミカ。

丸く小さな、

羽根模様が彫られたピアスを。

「……原初の神剣」

「ッ——うあ」

それが細く輝くレイピアの形に変化したとき、エンジュは無意識に自身の剣を手放していた。天性のバトルセンスで次に何が起こるか分かる。

——ピッ。

細い剣線が空を薙いだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

IV

天海雪乃

原作:さかさ傘

思春期なよアダム

FULL EYES

ヴァルキリーコミックス十あとみつく文庫最終巻同時発売!

ついに完結!!



あとみつく文庫 8&9 巻ともに

好評発売中!

二次元ドリームノベルズ

姫騎士

とろ蜜美女めぐりの
桃色バスツアー

日常に密着したエロス
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル!

小説家になるこの男性向けサイト
「ノックタリシノベルズ」
から書籍化!

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ?

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の
外伝作品もあり!
電子書籍でしか読めない電子書籍

フリーダム120%!?
ジャンルにとらわれない
ドキドキキアラノベル!

二次元ぷち文庫

新世界
ドキドキキアラノベル

ドキドキキアラノベルな
ハイレム系
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義の乙女が犯され、敗北絶頂をキメるアンソロジー!

【偶数月】
隔月発売
2・4・6・8・10・12月

【奇数月】
隔月発売
1・3・5・7・9・11月

【電子版】
毎月配信
書籍版は隔月
発売!



二次元
**ドリーム
マガジン**
2D DREAM MAGAZINE

UN COMIC
アンソリアル

**敗北乙女
エクスタシー**

あなたのキモチイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も
好評発売中!